様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年５月１７日現在

機関番号：１３１０１
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007～2010
課題番号：１９７００４８８
研究課題名（和文）「他者との身体的地盤を生成する体育」の理論的根拠に関する研究

研究課題名（英文）An Investigation into the Theory of Bodily Substructure for the Other in Physical Education

研究代表者
石垣　健二（ISHIGAKI KENJI）
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：２０３３１５３０

研究成果の概要（和文）：他者との身体的地盤は，体育（身体運動）の実践のなかで「他者を身体的にわかる」ことによって生成される．それは「他者を心的にわかる」ということとは異なった認識のあり方である．そこで重要となるのは「身体的対話」や「身体的な感じ」「身体的な超越的他者・超越論的他者」といった鍵概念である．また他者との身体的地盤は，「間身体性」の概念と密接に関係している．今後それらの概念を整理し，身体的地盤（間身体性）がいかにして構造化されるのかを明らかにする必要がある．

研究成果の概要（英文）：Bodily substructure is generated by bodily understanding the other into the practice of physical education. Bodily understanding is not a way of recognition different from mental one. Therefore it is important to explain the following key concepts; bodily dialogue, bodily (physical) feelings, physical “transcendent and transcendental other.” Then bodily substructure for the other is closely related to a concept of “intercorporeality.” In future, it is necessary to order these concepts and to demonstrate how bodily substructure (intercorporeality) is restructurized

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	500,000	0	500,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
総　計	1,900,000	420,000	2,320,000

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・身体教育学
キーワード：身体性哲学

１．研究開始当初の背景

（１）「他人とうまくコミュニケーションがとれない」「私的世界にひきこもる子どもたち」等の子ども観が叫ばれるようになってから久しい．子どもたちが抱えるこうした状況は，果たして彼らの「心」の問題だろうか．

価値多様化した現代社会において，子どもたちは，彼らが直面する多様な現実社会に柔軟に対処してゆかねばならない．そのためには，より柔軟な「心」が重視されることになる．しかし，そのような柔軟な心というのは，果たして「心の教育」によって形成され得るのだろうか．逆に問うならば，「心の教育」が企図する心的交流によって，本当の意味での「他人を受容・信頼する」ということが可能になるのだろうか．もちろん心的交流のためには，そのための心的動機づけが必要となるだろう．心的交流や心的動機づけを確保す

ることで，確かに他人とのやりとりは増えるかもしれない．しかし，そのような試みは，他者との「表面的なやりとり」にますます子どもたちを追い込んでいるように思える．

人間同士の関係は，もはや心的側面によってのみ捉えうるものでなく，昨今の子どもたちが抱える病的現状は，人間のさらに根深い部分に関係しているように思われる．つまり，確かに心的交流は重要だが，その心的交流や心的動機づけを支える前提について論究する必要があるのである．

（２）本研究は，そのような人間の心的次元の背後に身体的次元を措定しようとする．そうであれば，現代に噴出する「他者との関係性」の問題は，心的次元よりも，むしろ「身体的次元」から問い直さなればならない．すなわち，他人との心的交流や，他人に対する心的動機づけを問うのではなく，他者存在との身体的地盤を問うという作業が必要なのである．そこで重要となるのは，いかにして他者と身体的地盤を共有することができるかという問題であり，現代の子どもに必要なのは，そのようにして身体的地盤を共有することによって，他者とより親密な関係を築いてゆくことだと考えられる．

２．研究の目的

本研究の目的は，他者との身体的地盤づくりを促進するための教科として「体育」を措定し，「自己-他者」の間において身体的地盤が生成する理論的根拠を明らかにすることである．「身体的地盤」とはこの場合，一般的に心的とみなされる事象の背後にある事象と捉えることができるだろう．体育という教科活動によって，自己-他者の間に心的地盤ではなく，むしろ身体的地盤がどのように形成され得るのか．そして，そのことが体育という教科のみならず，一般的な他者との関係において，いかに重要な意味をもつことになるかを明らかにする．

３．研究の方法

次の（１）～（３）を総合的に検証しながら，体育における身体運動の学習過程が，自己-他者の間に身体的地盤を生成するそのメカニズムを明らかにする．

（１）体育・スポーツ哲学の分野において今まで展開されてきた道徳論議や倫理学説を批判的に読み進め，それらの論議を整理するとともに，その限界を見定める．日本では「体育における人間形成論」，そして欧米においては，スポーツ教育論の思潮から「スポーツによる道徳教育の可能性」が論じられてきたが，それらが単に希望的論議にすぎないということを文献のなかから探ることとなる．また，ドーピング問題が深刻化する近年のスポーツ倫理学（特に，欧米）では，スポーツと倫理をテーマとする研究も多くみられる．これらの研究から，「身体的次元から心的次元（道徳性）に接近する」ための着想を得ることが重要となる．

（２）教育学・教育哲学の分野において，「自他関係論」や「学習規範論」を展開している研究を中心に文献の読解をおこない，教育における「教える-学ぶ」関係（自己-他者の関係）において，そこで何が生じているのかその現象の意味を明らかにする必要がある．

このことに関わって，最近の教育哲学の分野においては，近代において確立した教師と生徒の「教える-学ぶ」関係を，再度問い直す作業がすすめられている．そこでは，子どもを「他者」あるいは「異質性」として認識しなければならないこと，そして教育という営みは，その「異質性」を超越させるという「超越性」を内包することが説かれる．このことを学習規範論として捉えるならば，それは，自己-他者の間に超越性というある種の身体的（道徳的）規範を構築することだともいえる．それを体育の学習過程において再解釈することが必要となる．

また，最近の教育学の分野においては，発達論的立場からでなく，生成論的立場から学習者を理解する方法が提案されている．これはある意味において，段階的・システム的教育の限界を指摘するものである．身体的次元を媒介にしておこなわれる体育という現象を説明するためには，特にこのような生成論が有効に適用されるものと考えられる．

（３）哲学分野の著作について，主に現象学的身体論・現象学的他者論を参考にする必要がある．現象学が体育現象の説明に適していると思われるのは，それがその性格からして，心的現象以前の事象の解明にとり組む学問分野だからである．メルロ＝ポンティ,M.,レヴィナス,E.らよる身体あるいは他者の思想によって，身体の働きあるいは身体的次元がいかにして人間の根源的部分を担っているのかを検討し，それが心的次元（道徳性）の領域の前提あるいは地盤となる着想を得ることが必要である．特に，レヴィナスの他者論において，他者を超越論的に捉える視点が参考となる．

４．研究成果

（１）2007 年度の研究成果

本年度前半は，体育における「教える-学ぶ」の関係を検討しながら，そこで獲得されうる超越論的他者という視点を提出し，それが身体的な「われわれ」の基礎となる可能性を示した（論文：教科体育における「超越論

的他者」の措定，「体育学研究」）．このことは，身体運動の学習によって，個別的・具体的な他者をわかるだけでなく，より普遍的な他者についてわかるということだといえる．そこで重要なのは，他者を「わかる」ということが，言語的・説明的に「わかる」ことではなく，まさに身体的に「わかる」ということである．つまり身体的次元において「われわれ」が成立するわけである．

このことを踏まえながら，本年度後半は，身体性と道徳性（心性）との関連に着目しながら，道徳的行為と身体性の問題がいかなる接点をもちうるかについて検討した（研究発表：道徳教育から身体教育（体育）へ，体育・スポーツ哲学会）．学習指導要領解説においても，「身体を通して学ぶ体育は，道徳教育そのもの」だという記述がある．しかし，どのようにして体育は，道徳教育たりうるのか．昨今の道徳教育論は，知的教育として「道徳的判断力」を育成し，そして，対話を重視しながら「道徳的実践意欲と態度」を育成し，さらに「心の教育」によって「道徳的心情」を育成しようと企図している．しかし，これらに決定的に不足するのは，実際の具体的な「経験」である．経験とは，心的な経験ではなく，直接的な身体的経験であり，実践へと繋がるような経験である．今後，こうした身体的経験の内実が何であるかを吟味する必要があるだろう．その内実が，他者と身体的地盤を共有するということであるならば，それが成立するメカニズムを問わなければならない．

（２）2008 年度研究成果

本年度前半の成果としては，原著論文：「『道徳教育として体育』序説-道徳教育（論）批判および身体的経験の必要性-」（審査有）が掲載されたことがあげられる．自己と他者との間に身体的地盤が生成するためには，まず他者との友好関係が問題にされることとなる．というのも，体育という教科は，永らく道徳教育あるいは社会的態度の育成を目的として実施されてきた経緯があるからである．本論文では，道徳教育（論）を批判的に検討するなかで，昨今の道徳教育が重視する心的経験よりも，むしろ体育においては身体的経験が必要になることを示した．しかし，ある経験が心的であるのか，身体的であるのかはいかなる判断基準によって決定されるのだろうか．身体的経験が「身体的」であるその意味を明らかにしなくてはならない．

上述のことと関わり，日本でおこなわれた国際スポーツ哲学会（IAPS）において，研究発表（Bodily dialogue and intercorporeity in physical activity）をおこなった．この発表は，スポーツが道徳教育（「われわれ」の拡大）に貢献するというプラグマティズムの見解を批判的に検討しながら，それらによって成立するのは心的な「われわれ」であり，決して身体的な「われわれ」とはならないことを示した．そして自己と他者とが「身体的対話」をおこなうことによってのみ「身体的なわれわれ」が形成されること，そしてその「身体的」とはまさに「身体的感じ kinesthetic feeling」を共有することであると説いた．

また，体育哲学分科会夏期研究会においても，研究発表（体育における「超越的他者」-超越論的他者となにが違うのか-）をおこなった．この発表は，前年度の成果論文をより詳細に理論化するために身体的な「超越論的他者」と「超越的他者」を区別し，その差異を明らかにしようとしたものである．後者は複数の具体的な他者から無自覚的に「一般化された他者」であり，前者は，ある具体的な他者から「普遍化された他者」である．両者はどちらも抽象的な他者という意味では同様であるが，「他者との身体的地盤」を生成するという際，異なった働きをしているのである．

（３）2009 年度研究成果

本年度前半には，「他者との身体的地盤」という本研究の最も重要なキーワードを，哲学・心理学その他の領域で論じられる「間主観性」および「間身体性」の概念にもとめながら，それらに関わる文献を分析した．結果として，それら領域において考察されるのは人間の「心」を射程にした間主観性の議論が中心となっていること，そして他者との身体的地盤が成立する根拠を探究するためには，身体を射程にした「間身体性」に注目しなくてはならないことを明らかにした．

とはいえ，身体あるいは間身体性に注目することによって，次のような課題が生じることになる．つまり，それを論じるための方法論が検討される必要性あること，そして，それら身体（間身体性）の問題を体育学独自の領域として措定する必要があるということである．この内容については，体育学会体育哲学分科会において研究発表（体育と間主観性・間身体性の問題）され，『体育哲学研究』に掲載された．

本年度後半には，他者との身体的地盤ということと「体育における人間形成」との関係を問い直すきかっけとして，友添秀則氏の『体育における人間形成論』を書評する機会があたえられた．そこでは，彼の人間形成論に身体形成（身体的地盤の生成）の次元が抜けおちていることを指摘しながら，我が国の体育学が主張してきた人間形成論に「身体性」を復権する必要があると説いた．この内容は『スポーツ教育学研究』に掲載された．

これらの内容は，国際スポーツ哲学会（シアトル）に参加した際，外国人研究者にその

是非について参考意見を聴取している．その内容の一部は，「世界のスポーツ哲学と日本の体育・スポーツ哲学」として，「体育・スポーツ哲学研究」に掲載された．

（４）2010 年度研究成果

本年度は，前年度から引き続き，自己-他者の「身体的地盤」という鍵概念を「間身体性（メルロ＝ポンティ,M.）」の議論を参考にしながら分析・検討した．メルロ＝ポンティ,M.の間身体性の概念は，人間にもともと備わる生得的なそれの印象が強い．しかしながら，本研究から考えるならば，間身体性は生得的であると同時に，体育（身体運動の学習）によって後天的に育成されるそれでもあるということを論じなければならないだろう．そのためには，間身体性が育成されるその構造について問う必要がある．そして，その構造を問うために，自己-他者の「かかわり」を「身体のかかわり（身体的対話）」としてとらえ直した．身体的対話において，自己と他者は互いの「身体的な感じ」をわかることになる．それは「心的な感じ」を交流させる「心的対話」とはまったく異なっている．心的対話によって間主観性は育成されるが，それは間身体性を育成するわけではない．間身体性は身体的対話によってのみ育成されるのである．これら身体的対話と間身体性の関係について論じた論文（Body Dialogue and Intercorporeality in Physical Education）は，『Philosophy of Sport (Alun Hardman ほか編)』に掲載された．

また，身体的対話において重要となる「身体的な感じ」とは何か（定義づけ）を探った考察（「身体的な感じ」とは何か-身体的な感じ，身体的対話そして間身体性-）は，本年度おこなわれた「国際スポーツ哲学会（IAPS）」において発表している．

（５）研究成果総括

４年間にわたり,「他者との身体的地盤」という鍵概念を掲げ研究をすすめてきたが，体育という運動学習の過程のなかでは，明らかに他教科とは異なった仕方で,「他者をわかる」ということが生じている．それは昨今の「心の教育」によって企図される「他者を心的にわかる」ということとは異なる認識のあり方と考えられる．そこでは「他者を身体的にわかる」あるいは「身体的対話」「身体的な感じ」「身体的な超越的他者・超越論的他者」というさらなる鍵概念が提出された．また,「他者との身体的地盤」と密接に関わる概念として,「間身体性」という現象学の概念が示された．その間身体性の理論をさらに読み解きながら，間主観性と間身体性の関係,あるいは間身体性と「身体図式」や「肉」といった概念との関係が明らかにされなければならない．

そして今後，他者との身体的地盤や間身体性に深く関わるそれら鍵概念を整理しながら，身体的地盤（間身体性）が，いかにして身体運動の実践によって構造化されるのか，すなわち身体運動の実践のなかでそれら鍵概念がどのように作用するのかを検討してゆく必要がある．

５．主な発表論文等

（研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計９件）

①石垣健二，小学生～中学生にとって必要な身体とは何か，査読無，コーチング・クリニック，25-1，pp.16-19，2010.

②Kenji Ishigaki，A Question about Physical Education/Sport and Intercorporeality(not Intersubjectivity): What is the Physical Feeling? 査読無，Abstract Book／38th Annual Meeting of the International Association for the Philosophy of Sport，p.46，2010.

③深澤浩洋・石垣健二，スポーツにおける意味生成-拡大体験の可能性とその契機-，査読有，体育学研究，55-1，pp.97-110，2010.

④石垣健二，体育と間主観性・間身体性の問題-鯨岡峻の議論を中心にして-，査読無，体育哲学研究，40，pp.43-50．2010.

⑤石垣健二，書評：友添秀則（2009）「体育の人間形成論」大修館書店，査読無，スポーツ教育学研究，29-1，pp.41-45，2009.

⑥石垣健二，世界のスポーツ哲学研究と日本の体育・スポーツ哲学研究-国際スポーツ哲学会 2009 に参加して-，査読無，体育・スポーツ哲学研究，31-2，pp.121-127.

⑦石垣健二,「道徳教育として体育」序説-道徳教育（論）批判および身体的経験の必要性，査読有，体育・スポーツ哲学研究，30-1，pp.27-45．2008.

⑧ Kenji Ishigaki，Bodily dialogue and intercorporeity in physical activity，査読有，Research seminar for sport philosophy 2008，単独発行，pp.19-20，2008.

⑨石垣健二・深澤浩洋・関根正美，教科体育における「超越論的他者」の措定：身体的な「われわれ」の成立，査読有，体育学研究，52-4，pp.327-340．2007.

〔学会発表〕（計６件）

①Kenji Ishigaki，A Question about Physical Education/Sport and Intercorporeality(not Intersubjectivity): What is the Physical Feeling?，38th Annual Meeting of the International Association for the Philosophy of Sport，University of Rome “Foro Italico” in Rome，2010.9.15.

②石垣健二,「身体的な感じ」とは何か-身体的な感じ，身体的対話そして間身体性-，日本体育・スポーツ哲学会第 32 回大会，新潟大学ときめいと，2010.8.21.
③石垣健二，体育学と間主観性・間身体性の問題，日本体育学会体育哲学分科会夏期合宿研究会，箱根静雲荘，2009.7.19.
④石垣健二，体育における「超越的他者」-超越論的他者となにが違うのか-，日本体育学会体育哲学分会会夏期合宿研究会，箱根静雲荘，2008.7.20.
⑤ Kenji Ishigaki , Physical Dialogue and Intrercorporeality in Physical Activity , 36th Annual Conference of the International Association for the Philosophy of sport，国立オリンピック記念青少年センター，2008.9.14.
⑥石垣健二，道徳教育から身体教育（体育）へ：「心の教育」批判および身体的経験の必要性，日本体育・スポーツ哲学会第 29 回大会，2007.8.11.

〔図書〕（計１件）
① Kenji Ishigaki , Body Dialogue and Intercorporeality in Physical Education，Alun Hardman(eds.) , Philosophy of Sport: International Perspectives，Cambridge Scholars Publishing，pp.86-95，2010.

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等　なし

６．研究組織
(1)研究代表者
石垣　健二（ISHIGAKI KENJI）
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：20331530
(2)研究分担者
な　し　（　　）
研究者番号：
(3)連携研究者
な　し　（　　）
研究者番号：